

しをいませけり、略中豊州きかれて先へよく意得てとばかりにて、とかくの返事なし、まばらくありて、近習のものを呼て、鶉籠の口を、みな庭のかたへむけよとある程に、みな外へむけ、れば、其口をのこりなくあけよとある程に、皆あけ、れば、鶉残らず、籠をいで、とびさりぬ、かの官醫見て、不審におもひ、久しく御手馴し鳥にて、又立歸り候ふやといへば、豊州いやさにてはなし、今日より残らず放ちやるにて侍る、さて序ながら申す、某ごとき上の御威光にて、人に執しおもはる、身にて、物はすくまじき事にて侍る、某このごろふと鶉をすき候へば、はやさやうにきこゆる人もおはし候、向後はふつと鶉すきをやめ侍るべしと、いはれしかば、かの官醫も手持なくみへしとぞ。

〔兔園小説 十二集〕騙兒悔非自新

加賀の金澤の枯木橋の西なる、出村屋太左衛門といふ商人の兩替舗は、淺野川の東の橋詰にあり、文化九年癸酉の大つごもりに、卯辰山觀音院の下部使なりと偽りて、出村屋が舗に來て、百匁包のしろがねを騙りとりたる癖者ありしを、當時隈なくあさりしかども、便宜を得ざりしとぞ、かくて十あまり三とせを経て、文政七甲申の年の大つごもりに、出村屋が兩替舗に、人の出入の繁き折花田色のいとふりたる風呂敷包をなげ入れて、こちねんとしてうせしものあり、たそがれ時の事なれば、その人としも見とめずして、追人ども甲斐はなかりけり、さてあるべきにあらざれば、太左衛門はいぶかりながら、件の包を釋きて見るに、うちにはしろがね百匁ばかりと、錢十六文ありて、一通の手簡を添へたり、封皮を析きて、その書を見るに、十とせあまりさきつころ、やつがれ困窮至極して、せんすべのなきまゝに、膽太くも悪心起りて、觀音院の使と偽り、當御店にて銀百匁を騙りとり候ひき、こゝをもて火急なる艱苦をみづから救ふものから、かへり見れば、罪いとおもくて身を容る、處なし、よりてとし來力を竭して、や、本銀をと、のへたれば、そ